

ぐるっけ

平成六年七月二十七日第三種郵便物認可
平成十七年八月一日発行（毎月一回一日発行）
第十二巻第四号（通巻第一三六号）

鈴



ぐるっけ

俳句雑誌

GLOCKE

第136号

8. 2005

バツハ奏

品川 鈴子

またも気迷ひ春雷の喝を浴ぶ

梅雨籠り子供病院ひつそりと

図書館で借る古今集パリー祭

バツハ奏汗の長身タクトとし



四万十の夜振り
は魚の鬼火とも

比翼碑に打身の裂けし
巴旦杏

草むしる碑より誓子と
波津女の声

^{はかど} 捗らぬままの梅雨
明け砂時計

有馬街道合歓の花にて
曲がる

祖父の松だけは水遣る
遅帰り



玉 鈴

兵庫 細野 恵久

形代に確かめて書く数へ年
抜け道を子についてゆく夏の果
あみだ引くかに朝顔の蔓たどる
白桃の 一皮へだてたる重み
掛け合ひも間延びがちなりきりぎりす

兵庫 堀井乃武子

風薫る煉瓦造りの旧兵舎
草茂る京へ三里の道しるべ
絵日傘の少女ひらひら三の丸
若葉風下肢痺れたる母は亡し
若葉風あなた私が好きですか

香川

宮城をにはかに隠し花の雨
入学子つむりに落花つけしまま
花疲れの人を吐き出す終電車
春コート見合ひに行くを悟られて

吟

愛媛

古墳より古墳の見ゆる白日傘
手品師の鳩出す手元黴臭き
松風の余白に高き藤の房
ぼんやりと炒子いりこの島の遠霞
猫の子の売れ残りなる器量よし

愛媛

薫風や窯出し陶すえの貫かん乳にゅう音おん
噴水がバネの力で風に立つ
伸び過ぎて親に凭れる今年竹
故里のデカンショの丘花は葉に
脱ぎ捨て、畦道塞ぐ蛇の衣

愛媛

咲き充ちて藤の大樹に翳かげりあり
とびとびの峡の数戸や苗床のどと寒がん
駐在所何時も留守なり金魚鉢
大家族今はひとりの春の宵
初鱒女一声耀り落とす

兵庫

柿若葉丁字が辻の丸ポスト
神苑の若葉翳りに軍馬の碑
鰻頭のほどよき塩味里若葉
齒科院の軒端はぐくむ燕の子
渡船待つ丸木棧橋夏燕

兵庫

迷ひ蜂造花の蕊に頭入れ
古里の小川に蜷数ふほど
分水領やがて合流東風の海
破れ傘おもちゃの如く群れ立ちて
拭き終へて厠の神に石竹挿す

香川

緑陰に入れば丸ごと印象派
夏蝶に案内されて奥の院
愛鳥の週は鳥かみすも追はずおく
空き店舗燕の巣まで空きしまま

和歌山

芥焼く煙真っ直ぐ朝ざくら
駅の階の階の遍路の鈴も鳴り急ぐ
道譲るボンネットバス夕遍路
藤の房さし来し傘で丈計る

茨城

念入りに淹れる珈排春深し
茅花流し車は速度落さざる
探す程隠れがちなる莢碗豆
朝餉にとポキポキ手折るアスパラガス

愛媛

湯搔ゆきても拳を解かぬ初蕨
入学の双子気になるクラス割
麦秋や苦楽分け合ふ老夫婦
草刈りの三日目愚痴の出はじめり

薬草歳時記

(一三五) ラッキョウ (薤白)

大音悦子

辣韭も置きある納屋なやの這入口

高浜 虚子

大分前の話になります、毎年六月になると七kgの泥付らつきようを買いました。家事の一段落した夜中の一時頃から洗い始め、ひげ根を取り塩漬にします。殆ど徹夜作業でしたが、若い頃で体力があつたのでしよう。苦にもならず楽しんでやっていました。

塩漬から酢漬の頃になると、「もうできた?」「うん、大分おいしくなったね」と、夫や息子達が一粒二粒、味見と称してつまんでいきます。私の漬けるらつきようは砂糖を使わず、はちみつだけを使うので市販のものとは味が違うよううで好評でした。

鳥取県の福部町は砂丘らつきようの大産地です。有名な砂丘に続いて広がるらつきよう畑を見に行きました。

七、八月の炎天下、種球を一粒一粒砂地に植え付けるのだそうです。秋に花茎をのばし、その先に可憐な紅紫の花を開きます(この花は結実しない)。らつきよう畑は一面紫の絨毯を敷きつめた様になり、それは雄大で素晴らしい

光景だそうです。

翌年春から五、六月頃又、翌々年夏に収穫、全国に出荷します。私が徹夜で洗って漬けるのとは大違い、全て機械化されていて、洗ったものは大きな浴槽のようなどころに塩漬にして保存されます。需要に応じて取り出し、酢漬などにします。細かく刻んで醬油や酢などに漬けたドレッシングもなかなかおいしいものです。

らつきようは古くから薬用にされています。『延喜式』(九一七年)には典薬寮の元日御薬の中に薤白が出ています。『農業主書』(一六九七年)には「味少し辛く、さのみ臭からず。功能あるものにて、人を補い温め、または学問する人つねに是を食すれば、神に通じ魂魄を安んずる物なり」とあります。

鱗茎に精油、糖類を含みます。薬理作用の詳細は不明ですが民間的に去痰、鎮痛、理気などの作用があることが知られており、心臓性喘息症、狭心症による呼吸困難・腹痛・食欲不振などに用いられます。

漢方では性味は辛苦温。肺胃大腸経に働きます。気を理え、結を散らす効があります。栝楼薤白白酒湯・栝楼薤白半夏湯・枳实薤白桂枝湯などがあります。

参考文献「原色牧野和漢薬草大図鑑」北隆館

「薬草カラー図鑑」主婦の友社

「中薬大辞典」小学館

「漢方医薬大辞典」雄渾社

著者略歴 神戸薬科大学卒 薬剤師

ラッキョウ〔ネギ属〕(ゆり科)

Allium bakeri Regel (= *A. chinense* G. Don)

(辣菲)(中) 薤白、薤根

植え付：7月～8月
花期：10月～11月上旬



薬用部分：鱗茎
寒地では春に暖地では夏
～秋ひげ根を除き水洗い
熱湯に通し、日干し

収穫：翌年5月～6月(一年掘)、
翌々年夏(三年子)
塩漬、甘酢漬

E.S.

薤ほる土素草鞋にみだれけり	飯田 蛇笏
九頭竜に辣菲洗ひの屑流れ	高浜 年尾
辣菲や砂丘を渡る風の声	老川 敏彦
素手素足らつきようを掘る軀かな	井上 雪
らつきようの白きひかりを漬けにけり	大石 悦子
辣菲漬け愚かな母で通しけり	中野あぐり
新尼のひそひそ漬くるらつきよかな	山本 梅史
なんとなくにせの大原女らつきよ売り	越路 雪子
夫好む憎き臭ひの辣菲漬く	品川 鈴子
ピリ辛の賛と否のありらつきよ漬く	森田 蓉子

ぐらっけ

鈴の奏

品川鈴子選

草笛のとび入りありぬ音楽祭
免れたる幹にせわしき蟻の列
兵庫 古井 公代

えら深くつり針つけし黒鯛ちぬめもらふ

ほめられてピアノ上達柿の花

保育園弾ける声と柿若葉
兵庫 正木 泰子

夏きざし十七文字をさがす島
をちこちに老鶯囀す仙酔島

初蝉や離島をつなぐ渡し船

おさな児の如き仕草で蓬摘む
兵庫 北中みやこ

片栗の花を漢等とり圍み

らんまんの堤のさくら眼うらに

全集に踊子草を確かと押し

薫風や子のおさがりの靴軽く
兵庫 中村 碧泉

宮大工つつじ明りにのみを研ぐ

真青なる粽の紐の長きかな

高原の濃きミルク飲み風薫る

先生の笛で園児も花も散る
香川 大空 純子

この場所を香りで覚えバラの園

吟行のアクセル吹かす若葉道

裾見えぬ五重の塔に緑立つ

俯伏せの茶杓のしづく夏近し
大阪 中村みち子

五月雨に聞き流すべ身につきて

サイの目を頑固に守り冷奴

いつまでも夫は折れずに蜆汁

駅裏の質屋ビルにもばら香る
大阪 角谷美恵子

下校路の先生ごっこ一年生

ぐいと立つ青権現も花の客

厨玻璃春の暮色を取り込めり

朴の花全ては天に見せるもの
香川 井上 綾

浅き池どこに居るのか墓

植物園脇に続くは遍路道

朴の花支える葉裏だけ見せて

パラソルを肩に預けて図鑑繰る
香川 近藤 倫子

我が事も少し打ち明け著我の花

秀 鈴 記

巻頭 三句 品川鈴子 評

四句く十五句 坂口美保子 //

*選句は全て 品川鈴子

草笛のとび入りありぬ音楽祭 古井 公代

草笛は葉を丸めたり、節のある麦の茎を中ほどで破るなど工夫して鳴らす素朴さが何よりです。意外にも愛好家グループがあり、私が夫の喪中に墓で佇んでいると、素敵な草笛が聞こえ心を洗われました。騒音を懼り墓苑で稽古するそうですが、楽器としての市民権があるのやら？侮れない音色節回しで音楽祭を魅了したことでしょう。

初蝉や離島をつなぐ渡し船 正木 泰子

渡し船を足代わりに、島から島へと自由に行き来する暮らしを、いち早く蝉が唯しはじめる。蝉声の加勢を得て島人は元気づけられるのでしょう。当の島人は何の不便も感じぬ楽園に違いない。

おさな児の如き仕草で蓬摘む 北中みやこ

蓬を摘み始めると、知らず知らず野山の懐に抱かれて無心の状態となる。摘み溜めた蓬はとてもいい香りで、幼ころが蘇り、摘む手つきも眼差しもまるで童女のような表情。こんな若返り方は仲々気がきいて乙なもので、おまけの草餅がまた楽しみ。

真青なる粽の紐の長きかな 中村 碧泉

粽は柏餅と共に端午の節句に作り、男の子の成長を祈る。真青に蒸上げられた粽の巻かれた糸口を見つけ解き始めた作者は、思いがけず紐が長いので、長いもんだなあとしみじみと見て、ゆっくりと召し上がったのでしょう。

吟行のアクセル吹かす若葉道 大空 純子

今日は吟行と張り切つて家を出て、方々見て歩き句も沢山出来た。が美しい若葉の道にさしかかり季語の中に入つたからには、もう一度自分にアクセルを吹かし、元気づけ句帖を一杯にしよう。若々しい句です。

サイの目を頑固に守り冷奴

中村みち子

賽の目に切るお豆腐というと、どうしても木綿豆腐でなければと思う。昔豆腐屋で深い水槽の中に沈んでいる木綿豆腐を買い、大き目の賽の目に切り氷水に浮かして食卓に出したのを思い出す。作者の様に冷奴は之が一番と思う。

下校路の先生ごっこ一年生

角谷美恵子

親に付き添われ緊張した入学式から大分日が経ち、学校生活にも慣れてきた一年生、どんな先生ごっこをやっているのでしょうか。

一年生の最初の担任の先生は子供の心にも深く印象づけられて、みんな先生になりたいと思っているのでしょうか。

朴の花全ては天に見せるもの

井上 綾

朴葉みそ、朴葉寿司などは白川郷で食べたことがあるが、花は私も見たことがない。朴の木は高木で五月頃花が咲く、下からは大きな葉が茂って見えない。花弁は九片、白い大きな花、上向きに咲き強い芳香を放つそう。作者も見

くてたまらないのに全ては天に見せる為に咲いていると納得した。

緑蔭の苦吟に会釈のみ交はす

近藤 倫子

吟行句会でメ切り時間と出句数が決められると全く苦吟の極みになる。緑蔭のベンチに憩っている様に見えても、お互いに句の推敲に懸命で席が空いても座ろうともせず会釈で通り過ぎる。

万緑に子の待ちかねる肉を焼く

唐鎌光太郎

見渡す限り緑一色のキャンプ地で子供達は思い切り跳ね廻っている。そろそろお腹のすく頃でお父様の出番。簡易バーベキューもセットされ、お肉を焼く煙りと香りが満ち、嬉々とした子供達の食欲を満たす。本当に楽しそう。人生で一番よい頃でしょう。

(以下略)